

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

こうすけは六年生の春に僕（井さとる）のクラスにやってきた転校生だが、僕としか、それも河童淵の秘密の「かくれが」でしか話をしない。釣りという共通の趣味を持っている僕たちは「かくれが」でかけがえのない時を過ごす……。

夏休みに入ると、僕とこうすけは、一大計画を立てた。それは、金魚屋の魚を釣ってしまおうというもので、早い話が、泥棒である。そもその話の始まりは、終業式の前日の、あきらの自慢話からだった。

「おれさあ、きのう、とうさんと釣り堀へ行ったんだぜ」教室の一番うしろの席で、あきらがそういうと、僕たちは、あきらのまわりに群がった。

「釣り堀って、どこなの？」

「北町の釣り堀」

「県道沿いの？」

「うん。とうさんと行ったんだ。コイのさあ、でっかいのばかり、うじゃうじゃいるんだぜ」あきは、両手をいっぱい広げて、少し大きめに、そういった。

「ええっ、ほんととかよ」

「うそだろ」

みんながざわつくと、あきらは、

「いや、このくらいだったかな」と、照れながら、広げた手を六十センチくらいにもどした。そして、「とにかく、釣れる魚、釣れる魚、ぜんぶこんなにでかいんだ。なにしろ、一メートル十センチの魚拓が、はってあるんだぜ」

一メートル十センチ。それは、僕たちの想像をはるかにこえていた。まるで、浦島太郎のカメの世界である。僕は、身を乗り出して、あきらに聞いた。

「その池さあ、ぜんぶコイなの？」

「ああ、ぜんぶコイ。練り餌をつけるとね、すぐ引くんだ。入れぐいだぜ。だけど、大きいから釣り上げるのがたいへんさ。もう、おれなんか、手が痛くって、痛くって」あきらは自慢げに手を震わせた。

教室には、あきらのほかに、釣り堀で釣りをしたことのある者は、僕も含めて一人もいなかった。だから、なおさら夢のような話である。

（一度でいいから、そんな大物を釣り上げてみたい）と、思った。

ふと、気がついて、教室のうしろのほうを見ると、こうすけは、自分の席で窓の外を見ていたが、耳はしっかりと、こちらに傾けているようだった。

「ねえ、あきらの話、覚えてる？」かくれがで、僕は、こうすけにいった。

「釣り堀の話か」

「うん。こんなに、でかいやつばかりだよ。夢みたいじゃん。一度でいいから行きたいよな」

「行けば？」

「お金がないよ。二時間、千円だよ」

「高いなあ」

「そうだろ、だから、子どもにはとてもむりなんだ。大ゴイが、うじゃうじゃで、がばがばかあ。いやな」僕は、みれんがましく、そういった。

「お前は、釣りがうまくなったし、この川でも釣れるからいいだろう」

「それとこれとは、別だよ」

「別か？」

「うん。全然ちがう」

こうすけは、しばらく考えて、こういった。

「そうだ、いいことがある」

「なに、なに？」

「大きなコイが、がばがばいるところがあるよ」

「えーっ、どこどこ、教えて教えて」

「すぐ、近くさ」

「近く？」

「ああ、田中金魚」^②こうすけは、そういうと、まん丸の目で、僕の反応を確かめた。

「それって、まさか、金魚屋さんの池のコイを、釣っちゃうってこと？」

「おう、そうだよ」

「だめだよ、そんなの泥棒じゃないか」

「泥棒……だな」こうすけは、本気とも冗談ともとれない顔で笑った。僕は、

「話に、なんないよ」と、いいながらも、田中金魚の池にうじゃうじゃいる鯉のことを考えていた。

田中金魚へは、お父さんと金魚を買いにいったことがある。北町を南北に走る県道沿いにその店はある。小さな店の中には、金魚や熱帯魚のほかに、エサやコンプレッサーも置いてあった。

その日は、妹が家の金魚で、てんぷらごっこ（金魚に砂をまぶして、てんぷらにするまご）をしてしまったので、赤い金魚二匹と、出目金一匹を買った。でも、僕は、金魚よりも、ゼブラキヤットという、しま模様のナマズがほしかったのを覚えている。

店の外では、コンクリートに仕切られた池が十個ほどあり、それぞれに、金魚や錦鯉が泳いでおり、その奥に二十メートルほどの、大きな池があった。小さな池は、浅く、水もきれいだつたが、プールのようなその池は、深く、水も緑色ににごっていた。しかし、ときどき、大きな鯉がばしゃりと水面をたたくので、そこには、たくさんの鯉が入っていることが想像できた。

こうすけは、もし、と念を押して、僕に聞いた。

「なあ、さとる。もしも、だよ、もし、本当に田中金魚のコイを釣るとしたら、お前ならどうする？」

「そうだなあ、まず、夜だね。人のいない夜か、朝早く行って釣るな」

「どうやって？」

注1 魚拓は魚に墨を塗り、紙や布をあてて形を写し取ったもの。

注2 コンプレッサーは空気を圧縮して水中に送り込む機械。

「うん、あの店、正面には扉があるけど、裏は確か、用水路で、仕切られているんじゃないかな。だから、あの用水路から、はい上がって攻めたらいいんじゃない」

③ 実際、プールのような池の、すぐ裏は用水路で、うまいぐあいに今の時期は、ほとんど水が流れていない。用水路の深さは一・五メートルくらいで、僕たちが手を伸ばせば、容易に上がることができる。

「こうすけは、にやにやしなから、」

「お前さあ、泥棒の才能があるぜ」と、いって、僕をひやかした。

「もしもの話じゃないか」僕が、いいわけをしようと、こうすけは、

「でも、完ぺきだ」そういって、僕の目を見るのだった。

確かに、完ぺきだった。用水路を歩けば、人に見つかるともないうし、ましてや夜とか、早朝であれば、絶対だいたいしようぶだった。

「やるしかないな」

「……うん」

僕は、生まれて初めて、泥棒を決意した。

次の日、僕は朝早く家を抜け出した。約束の午前四時、二十四時間営業のコンビニエンスストアには、二、三人の客はいたが、こうすけの姿はなかった。僕は、仕方なく外に出て、自動販売機の前で待つことにした。

「さどる、待ったか」

じきにこうすけは、現れた。

「ううん。いま来たところ」

二人とも、こころなしか声を低くした。僕たちは、さつそく、田中金魚にむかって歩くことにした。早朝のひんやりとした風が、Tシャツの腕をなでる。満月がやけに明るく、僕たちを見おろしている。見張られているようだ。しかし、僕の心には、うしろめたさなど少しもなく、

こうすけも、無言だった。二人、黙って歩いた。

しばらく歩くと、田中金魚の近くにある、用水路の橋についた。

「行くぞ」こうすけは、小さい声でさういって、橋の下の階段をつたって用水路におりた。僕も、すぐあとを追った。

用水路の下は、コンクリートでかためられており、水は、五センチほどの深さで平らに流れていた。真つ暗な用水路の水のところだけが、満月に照らされて白い帯のように見えた。

「ついでに、さどる」

「うん。このへんだね」

僕たちは、土手の草を両手で握りしめ、身を乗り出すようによじのぼった。首を伸ばすと、電灯に照らされた大きな池が横たわっている。まさしくここは、田中金魚だった。

こうすけは、ポケットから仕掛けを取り出すと、僕に手渡した。それは、たこ糸に針を結びつけただけのものでしたが、もし、見つかったときのことを考えると、ポケットにかくせるので、これが一番に思えた。エサは、食パンである。実際、こういう池の鯉はなんでも食べる。

「さどる。おれが見張っているから、早く釣れ」

④ 「僕が、やっていいの？」

「当たり前だ。さあ、早く」

僕は、食パンを指先で押しつぶすと、粘土のように丸めて、針に付けた。そして、あたりをうかがうと、静かな水面に投げ込んだ。

ポチャン。

エサは、波紋を広げて沈んでいった。と、突然、右手にたばねたたこ糸が、引たくられた。

「来た、来たよ」

「落ち着け、ゆっくりだぞ」

ゆっくりと、たこ糸を引きよせると、やつが水中でグン、グンと首を振るのがわかった。

「いいか、暴れさせるな。音をたてないようにしろよ」

「うん、でも、すごい引きだよ」

大鯉は真つ暗な水の底へ、僕を引きずり込もうとしているようだ。負けないように、腕をぐいと引く。たこ糸が、水中にむかって一直線に伸びる。そのとたん、糸がふつと軽くなった。

「逃げたか」

「うん。逃げられた」

ウ。泥棒という罪の意識よりも、一匹を釣り上げるスリルが、僕をつつんでいた。

エサをつけ直し、もう一度、すばやく池に投げ込んだ。

ごぼつ。

すぐに、また、引っぱられる。

「あつ」

しかし、また、はずれてしまった。

「竿がないから、すぐはずれるなあ」こうすけが、いった。

「なかなか、むずかしいよ」

「手で、クッションをつけて、やわらかく引いてみるよ」

「わかった」

「だいじょうぶ。すぐ釣れるから」こうすけは、さういって、

つかからないだろうか。夜が、明けてしまわないだろうか。不安だった。

「よし、かかった」

今度は、思いのほか、引きが弱かった。

「こうすけ、これは上がりさうだよ」

「そうか、しんちようにな」

魚は、右へ左へと反転しながらも、ゆっくりと近よってきた。そして、魚が手の下にきたとき、僕はそつともち上げた。

「ばしゃり。」

魚の影が、浮かんだ。

こうすけは、すばやくそれを両手でつかむと、黒いビニール袋におさめた。そして、ばさばさと音のする袋に水を入れながら、

「いいぞ、もう一回」と、いった。

エ。店の人に、見

「もういいよ。行こう」

「もういいのか？」

「うん。心臓が止まりそうだ」

「いくじなしめ」

僕は、たこ糸を丸めると、ポケットにねじこんだ。そして、ビニール袋の中で暴れる魚を抱えながら、二人で用水路を走った。

かくれがにつくと、もう、すっかり夜が明けていた。

僕たちは、一目散に、河童淵にむかうと、大事に抱えてきた魚を生けすに放すことにした。生けすには、前から魚が放してあったが、ビニール袋を破ると、その黒い魚たちの中に、真っ赤な魚がおどり出た。

⑤「あっ。金魚だ」思わず、僕たちは叫んだ。

「金魚か。錦鯉じゃなかったんだな」

金魚といっても、三十センチ近い大物で、真っ赤な体は丸々と太り、尾鰭は三角に割れていた。

「きれいだね」

「ああ」

金魚は、落ち着かない様子で、生けすの中をゆらゆらと泳いだ。さっきまで、僕たちの心臓は爆発しそうであったが、今日、一番驚いたのは、この金魚であっただろう。

「金魚ってさあ。中国から来たんだぜ」

「えっ、中国？」

「金魚は昔、中国で、つくられたんだ」

「つくられた？」

「ああ、つくられたんだ。突然変異って、知っているだろう」

「うん」

「金魚は、もともとフナだったんだよ。フナの突然変異で、ヒブナっていう、赤いフナが見つかったさあ、それから、人間の手で、そういう変わったもの同士をかけあわせて、できあがったのが、金魚なんだってさ」

「へえ。だから、あんなにきれいなのか」

「きれいねえ」

「えっ、こうすけは、そう思わないの？」

「そりゃ、見た目は、はでだけどなあ。それより、お前。あの金魚どうするんだよ？」

「そうだな、どうしよう」

「食べもしない魚、いつまでも、生けすに入れとけないぜ」

「うん。そうさ。この、河童淵に逃がしてやるよ。だって、金魚も自然の中が一番うれしいんじゃないかなあ」

僕は、名案だと思った。金魚屋の金魚を、自然の川に放してやることは、金魚自身、きつと喜ぶだろうし、囚われのお姫様を助けるようで、かっこいいなとも思った。ひよっとしたら、金魚泥棒のうしろめたさを、正当化しようとしていたのかもしれない。

「川に、逃がすのか？」と、こうすけがいった。

「うん、名案だろ」僕は、少し得意げにこたえた。

「川にか」

「なにか、気に入らないの？」

⑥「そういうわけじゃないけどな」

「なんだよ、はっきりいえよ」

「いいよ、お前の獲物だ。お前の好きにしな」こうすけは、素晴らしい残すと、一人でかくれがのほうへ歩いていった。

しばらくの間、僕は、金魚の赤い鱗や、透ける尾鰭のゆらめきをながめていた。

その夜、僕は、夢を見た。実に、リアルな夢だった。僕自身が、一匹の赤い金魚になって、河童淵を泳いでいるのだ。水の流れがきつかった。出っ張った腹や、大きな鰭が邪魔をして、思うように前へ進めなかった。ほかの魚はスイスイと泳ぎ、メダカまでもが僕をばかにして笑った。流れの遅い深みに行くと、岩陰から大口を開けた大ナマズが現れた。倒木の陰からもライギヨがにらんでいた。みんな僕を食べようとしていた。

「食べられて、たまるか」

必死で逃げた。いくら逃げて逃げても、なかなか前に進まない。大声で叫んでも、だれも助けてはくれない。僕は、独りぼちの金魚だった。

やっとの思いで逃げ切ると、浅瀬で休むことにした。ほっとした瞬間、空から黒い影が、舞いおりた。それは、トンビだった。僕は、トンビのクチバシでひと刺しにされ、一気に呑み込まれた。トンビの暗くあたたかい腹の中で、僕は思った。

「強く流れてくる水は、ぶざまな僕にはつらすぎる。それに、青く澄んだ水中で、僕はあまりに目立つなあ」

汗をかいて起きたとき、目覚まし時計は午前四時を指していた。僕は、家族に気づかれないように家を抜け出すと、かくれがにむかった。そして、バケツに水を汲み、金魚を入れると必死で走った。⑦田中金魚を目指して走ったのだ。ときおり、こぼれた水が白い運動靴をぬらした。

金魚は、おとなしくバケツの中でゆらゆら揺れていたが、起きているのか、眠っているのかは、よくわからなかった。

(阿部夏丸「泣けない魚たち」による)

問一 ——線部①「おれなんか、手が痛くって、痛くって」とありますが、あきらの話をさとするほどのような気持ちで聞いていたと考えられますか。もつとも適切なものを次の1〜4の中から選び、その番号で答えなさい。

- 1 疲れるほど釣らなければならなかった同級生を気の毒に思っている。
- 2 誰でも経験していることを大げさに報告する同級生をほほえましく思っている。
- 3 大きな魚を釣り上げる機会に恵まれた同級生をうらやましく思っている。
- 4 うそまでついて釣り堀での釣りを自慢する同級生を腹立たしく思っている。

問二 ——線部②「こうすけは、そういうと、まん丸の目で、僕の反応を確かめた」とありますが、このときのこうすけの気持ちはどのようなものだったと考えられますか。もつとも適切なものを次の1〜4の中から選び、その番号で答えなさい。

- 1 釣り堀などに興味を抱く友人に対して憤りを感じて、そんな友人をからかってやろうという気持ち。
- 2 自分の誘いに友人が乗ってくるのか、それとも拒否するのか、その反応を見てみたいという気持ち。
- 3 釣りが苦手でたよりない友人をいつものように思いやり、その願いをかなえてあげようという気持ち。
- 4 自分との遊びよりほかの級友との遊びに興味を抱いた友人を、なんとかして引き戻したいという気持ち。

問三 ——線部③「こうすけは、にやにやしなう」とありますが、なぜ、こうすけはそういう表情をしたと考えられますか。もつとも適切なものを次の1〜4の中から選び、その番号で答えなさい。

- 1 クラスにとけ込めない自分たちが、あきらを見返すことができると思ったから。
- 2 さとるが立てた計画が予想していた以上に完ぺきだったことに驚き、見直したから。
- 3 これで自分たちも鯉をたくさん釣れると思っ、早くも気持ちが高ぶってきたから。
- 4 自分の提案に反対していたさとるが同意してきたので、内心おもしろく思ったから。

問四 本文の ア イ にあてはまるものを、次の1〜4の中からそれぞれ選び、その番号で答えなさい。なお、同じ番号を二度以上使うことはできません。

- 1 どきどきして、心臓が爆発しそうだった
- 2 僕には、この時間がとてつもなく長く感じられた
- 3 運動靴にしみ込んでくる水が少し気持ち悪かった
- 4 「やるぞ」という、武者ぶるいのようなものを感じていた

問五 ——線部④「当たり前だ。さあ、早く」とありますが、なぜ「当たり前だ」と言ったのですか。もつとも適切なものを次の1〜4の中から選び、その番号で答えなさい。

- 1 さとるが大きな魚を釣りたいと言ったから始まった計画であり、こうすけは自分で釣ることにあまり関心がなかったから。
- 2 最初に完ぺきな計画を立てたのはさとるなので、こうすけは自分の釣りたい気持ちをおさえなければならなかったから。
- 3 まずさとるが釣るにしても、交互に釣るのだからどちらが先に釣ってもかまわない、とこうすけは考えていたから。
- 4 さとるに対していばってはいるものの、実際に自分で金魚屋の池から魚を盗み出す勇気がこうすけにはなかったから。

問六 ——線部⑤「あっ。金魚だ」とありますが、ここでさとるとこうすけは、釣り上げたものの正体に気づきます。実は釣り上げたものが金魚であることを予告するようなことが、ここより前の場面に書かれています。それを説明した次の文の に入る言葉を、本文中から七字で抜き出して答えなさい。

それまで逃がした魚に比べて こと。

問七 ——線部⑥「なんだよ、はっきりいえよ」「いいよ、お前の獲物だ。お前の好きにしな」とありますが、こうすけが「はっきり」自分の考えを言うとしたら、どのような言葉が考えられますか。もつとも適切なものを次の1〜4の中から選び、その番号で答えなさい。

- 1 おれは釣っていないが、苦勞して釣り上げた獲物を逃がすなんておかしいぞ。
- 2 お前は気づいていないみたいだが、川に逃がすのは金魚のためにならないぞ。
- 3 せっかく完ぺきな計画だったのに、店に戻したら盗みがばれてしまうぞ。
- 4 せっかくおれも思いついた名案だったのに、お前に先に言われて面白くないな。

うけれど、それだけではないと思います。そういう密閉的な家を好む人が増えているんです。子どもが家に友だちをつれてくると、嫌がる親が増えましたし。今は親戚でも、あらかじめ電話をせずに訪問してきたら、ずいぶん嫌な顔をされるでしょう。でも、ぼくたちが子どもの頃は、アポイントメントをとらずに、お互いの家を行き来するというのはごくふつうのことでした。

家が閉ざされてきて、学校も閉ざされてきて、どこもかしこも狭苦しくなっています。小学校などで「いじめ」が起こる理由の一つはその狭苦しさでしょう。学校の教室がパブリックな空間ではなく、空気がどろりと澱んだ、濃密にプライベートな空間になっている。子どもたちも教師たちも、自分の家にいるときと同じような、ずるつとしたしゃべり方をし、私生活と同じようなマナーでふるまっている。公私のふるまい方を切り替えるということのたいせつさをもう誰も教えない。その方が「風通しがよくなる」ということを誰もアナウンスしない。

(中略)

要するに、ぼくが言いたいのは、家を開放的なシステムにしないとまずいよ、ということに尽きます。身内だけで固まった場所が現に暴力と狂気の温床になっているということ、メンバーたちの心と身体を傷つける場になっているということ、この事実をもっとアナウンスされるべきだと思います。多くの家庭はもうすでにその成員を「癒す場」であるよりむしろ「損なう場」になっているとぼくは思います。むしろ、今の子どもたちにとっての急務は、いかにして家庭という危険な場所を無傷で逃れ去るかということだと言っても過言ではないでしょう。

家庭を生き延びるための戦略は、とにかく家庭では「素」に戻らないということです。親は「親らしく」ふるまい、子どもは「子どもらしく」演技的ふるまう。お互いの内面をさらけ出し合うというよな「はしたない」ことは家庭の中では自制する。そういう節度のあるふるまい方を家族とともにあるときも保つことです。

⑦、と怒る人がいるかも知れません。でも、そういう人は「親しみ」ということと「馴れ合い」ということを混同しているではありませんか。ほんとうの親しみというのは敬意のないところには成立しません。

温かく親しみのある家庭というのは、みんながエゴを剥き出しにし、本音を遠慮なくさらけ出し合うような家庭のことではありません。そうではなくて、一人一人が欲望を自制し、内面を隠し、期待されている家庭内の役割をきちんとこなし、そうすることでほかのメンバーの「家庭以外の場所・家族以外の人間関係」における活動を支援する集団、それがたたく「癒し」の場であるような家庭だとぼくは思います。

ぼくが「自立しろ」ということを学生にがみがみ言うのは、一人で暮らした方が気楽であるとか、誰にも依存しない生き方は素晴らしいとか、そんな薄っぺらなことを言いたいからではありません。そうではなくて、自立できる人間、孤独に耐えられる人間しか、温かい家庭、親しみのあふれる家庭を構

注4 アポイントメント：面会の約束。

注5 成員：その集団を構成する人員。メンバー。

注6 エゴ：自我。ここでは「身勝手さ」のこと。

注7 依存：他のものに頼って生きること。

築することができないと思っているからです。一人でいることのできる人間だけが、他者がかたわらにあるときの温もりに、深い感謝と敬意を抱くことができるのです。

逆説的なことですが、「温かい家庭を構成できる人間」とは「一人でいることに耐えられる人間」のことです。「自分のために家族は何をしてくれるのか」ではなく、「家族のために自分は何をしてあげられるのか」ということを優先的に配慮するような人間のことです。

⑧ 家庭は社会であり、家族は他者です。

(内田樹「疲れすぎて眠れぬ夜のために」による)

問一 — 線部①「パブリックスペース」とは「公的な空間」という意味ですが、「パブリック」と反対の意味を持つ言葉を、本文中から七字で抜き出して答えなさい。

問二 — ②に入れるのにふさわしい漢字一字を考えて書きなさい。

問三 — 線部③「どろどろに癒着している」とは、どのような状態のことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から選び、その番号で答えなさい。

- 1 隣近所と接点がないことで隣同士が無関心となり、いざという時に助け合いができないような状態。
- 2 隣近所の存在を嫌い合うことで隣同士が険悪な関係になり、信頼関係がまったく形成されていない状態。
- 3 家族の決まりきったメンバーだけで一体になっているために、新しい出会いや発見が生まれないう息苦しい状態。
- 4 家族と価値観や考え方が合わないために、仲が悪くなってしまい、お互いに顔を合わせることもない状態。

問四

——線部④「昭和三十年代くらいまでは、東京だって、そういうふうだったのです」という表現には、筆者のどのような気持ちがかめられていると考えられますか。もっとも適切なものを次の1～4の中から選び、その番号で答えなさい。

- 1 不便だった昔の時代のことを思い出しながらも、便利で快適になった現代社会を誇らしく思う気持ち。
- 2 都心部でさえ人の出入りが多かった時代に、地方では人の交流がとぼしかったことを残念に思う気持ち。
- 3 昔ながらの建物が姿を消し、近代的な建物ばかりが増えて殺風景になっていることを不満に思う気持ち。
- 4 現代の家庭のあり方に不満を抱きつつ、家庭と家庭との隔たりがなかった昔の時代を懐かしく思う気持ち。

問五

——線部⑤「ずるっとしたしゃべり方」はどのようなしゃべり方のことですか。もっとも適切なものを次の1～4の中から選び、その番号で答えなさい。

- 1 自分の考えが正しいと思いきみ、周囲の意見に耳を貸さずに見下すようなしゃべり方。
- 2 表現力が足りないために意味がわかりづらい上に、言葉づかひも乱暴なしゃべり方。
- 3 自分の考えをはっきりと示さず、周囲の様子をうかがってばかりいるあいまいなしゃべり方。
- 4 社会的な場所にいるという自覚がなく、周囲の人に対する配慮や緊張感に欠けたしゃべり方。

問六

——線部⑥「多くの家庭はもうすでにその成員を『癒す場』であるよりむしろ『損なう場』になっている」とありますが、では「癒す場」としての家庭とはどのような場所のことだと筆者は考えていますか。その答えを含む一文の最初と最後の五字をそれぞれ抜き出して答えなさい(句読点を含みます)。

問七 ⑦ に入れる言葉としてもっとも適切なものを次の1～4の中から選び、その番号で答えなさい。

- 1 そんな白々しいのは家庭じゃない
- 2 すべての家庭に当てはまる話じゃない
- 3 家庭内の事情に他人が口出しすべきじゃない
- 4 家庭での「馴れ合い」を悪く言うべきじゃない

問八

——線部⑧「家庭は社会であり、家族は他者です」とありますが、その説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中から選び、その番号で答えなさい。

- 1 家庭とはどんな時にも自分を受け入れてくれる場であり、家族には何事についても真剣に自分の率直な考えを伝えなければならないということ。
- 2 家庭は一定の約束事や秩序から成り立っている場であり、たとえ家族であっても自立した人間として敬意をもって接することが大切だということ。
- 3 家庭とは少しでも気を抜くと裏切られる孤独で厳しい空間であり、たとえ家族同士であっても油断してしまうとひどい目にあう可能性があるということ。
- 4 家庭では相手のためにつくすことが最も大切なことであり、自分を犠牲にする覚悟がなければ家族といえども他人のような関係になってしまうということ。

問九

——線部「狭い部屋を他人とシェアしている場合は、ささやかながら社会的なルールを決めて、それを守ってゆかなければならない」とありますが、あなたが他者と共同生活をするとしたら、お互いの生活を快適にするためにどのようなルールを作りますか。その理由も含めて具体的に八十五字以上百字以内で述べなさい。ただし、必ずしも本文の内容を前提とする必要はなく、あなたの考えを自由に書いてください(句読点を含みます)。

三

次の——線部①～⑦のカタカナの部分を書きなさい。また⑧⑩に、下の（ ）の中の言葉と同じ意味になるように、漢字一字を書きなさい。いずれも一画二画をていねいに書くこと。

医師から診察のシヨケン^①を聞く。

指導者がエイダン^②を下す。

ハイスイの陣^③をしく。

友人の意見にキヨウメイ^④する。

ジセキ^⑤の念にかられる。

重大なニンム^⑥を与えられる。

カッコ^⑦とした地位を築く。

⑧ 名者（＝名づけた人）

発⑨ 人（＝その計画を始めた人）

門外⑩ （＝専門家でない人）

（以下余白）

